



## 卓 話



### 「世界で最も優れた政治指導者の一人ダライ・ラマ」

日本文化チャンネル桜 キャスター

大高 未貴氏

チベット民族への北京政府の容赦ない武力弾圧に、世界中の批判が沸騰している最中の4月10日、ダライ・ラマ14世が日本経由で米国に渡った。成田でのトランジット



タイムに、法王は記者会見を開き、頭の上に指を出して「私は悪魔ですか？」とおどけて見せた。「悪魔のような国家分裂主義者」と決めつける北京政府への強烈な反撃だが、成田まで会いに行った日本の政界関係者は、安部前首相夫人と太田誠・人権問題調査会長だけ。多分、5月の胡錦濤来日を控え、与野党ともに“中国様”に気兼ねした結果ということだろうが、各国の指導者が五輪開会式ボイコットを宣言し、パリ市が法王を名誉市民に任命したこと等を考え併せると、日本という国の人権に対する鈍感さと、国家意思の欠如をはからずも浮き彫りにした出来事だった。

この時期、私は上海にいて、中国の一般市民がチベット問題をどう捉えているのか取材していたのだが、彼らの唯我独尊ぶりには相当呆れた。何しろ大半の人間には「チベット？中国の片田舎で起こった暴動でしょ。西側諸国の北京五輪批判は、驚異的な発展を遂げている中国への嫉妬でしょう」くらいの認識しかないのだ。例えば上海大学を卒業したばかりの沈さんはありがとう毛沢東様。あなたのお陰で、我々チベット人は悪魔の“ダラ”の圧政下におかれ、農奴だった悲劇から解放されました。という歌を披露してくれ「チベット人も皆、感謝して歌いますよ」といったものだ。人種、民族問題の複雑さなど意識の欠片にもないのだ。その所以は、北京政府の情報統制と、歪んだ歴史教育によるものだが、責任の一端は“13億の市場”に幻惑され、中国の横暴を見て見ぬふりをして放置してきた西側諸国にもある。

実際、五輪聖火リレーでも、ロンドン、パリでは「フリーチベット」を叫ぶチベットの雪山獅子旗が目立ったが、オーストラリア、アメリカを移動するにつれて、中国の五星紅旗が数を増し、ついに日本の長野では、ほ

とんど赤一色に染められた。それは中国の金と力の誇示でもあった。こうした逆境を、成田でのダライ・ラマ法王はユーモアに転換して反撃したのであり、それだけチベットが置かれた状況が絶望的だということでもある。しかし絶望的状况をユーモアに転換して、明日への希望に繋げるという手法は、最も理性的な人間のなしえる術でもある。

数年前『ビューティフル・ライフ』という映画があった。アウシュビッツに収容された主人公のユダヤ人男性が、常にジョークを忘れず、周囲を笑わせ、ガス室に連行される瞬間にも子供たちに“いない いない バア”をやってみせたという実話に基づくもので、生き残った者たちが「あの笑いがあったからこそ、絶望に耐えることができた」と回想する物語だ。つまりユーモアは極限状況の人間をも救ったのだ。

そうした意味では法王が「五輪は開かれるべき」「求めているのは高度な自治だ」という諧謔の裏を知らねばならない。かつて私は、チベット亡命政府があるインドのダラムサラで、ダライ・ラマ法王に直載なインタビューをしたことがある。

—完全なる自治とはどんなものなのでしょうか？

「私の考えている自治は、文化的、精神的遺産を後世に伝える自由のことです」

—そのために法王は非暴力を唱えています、その間にも弾圧され、惨殺されるチベット人は後を絶ちません。それをどう考えればいいのでしょうか？

「大変悲しむべきことです。しかし暴力には暴力をという行為は、お互いの憎しみを増幅し更に大きな悲劇を生むだけです。だから人間とその人間の行動を区別して考えるのです。この国のこういった政策には反対だ、ここは理解できないと表明し、異論を唱える。しかし相手と同じ人間として尊重する気持ちを忘れない。例えば、自分が何か悪いことをしたら謝りますね。この時、自分のすべてを否定しているわけではありません。私という、人間の尊厳をもった自分がいて、その中の1部が悪いことをしてしまい、それについて反省し謝罪しているのです。これが私の言う、人間と行動を区別するということです。もっとも、目に余る悪行に対しては、日本の柔道で応戦してもいいですよ」

この時私は、ダライ・ラマの特別警護隊に定期的に技術指導している警備会社テイケイの柔道家たちと一緒に

法王に会ったので、最後のジョークは彼らへのギフトである。

インドのダラムサラは首都ニューデリーから車で約13時間。身も心もボロボロになった亡命チベット人が毎日のようにたどり着き、弾圧された同胞の死や我が身に振りかかった想像を絶する厄災を法王に報告する。高度5千メートル、零下30度のヒマラヤ山脈を軽装備で越えるのだから凍傷で足の指がなくなってしまった者、気がふれてしまった者、国境警備隊に見つかり射殺されたetc、悲劇の物語は数限りなくある。そうした彼らの憤怒や痛みを共に分かち合いながらも、法王が敢然と決意しているのは、自分を慕うチベット民衆の血を、これ以上絶対に流させたくないという思いだ。何しろ侵略が始

まった50年から59年までの騒乱までに、破壊された寺院6千、虐殺されたチベット人120万人。だから法王はインドに亡命もした。もし本気で独立戦争などしたら、圧倒的な武力の前にたちまちジェノサイドにあい、チベットは世界地図から消滅する。それを避け、チベット民族の歴史と文化遺産を守り続けようとし、法王はまさに神業的な努力を続けている。それを支えているのは強靱な精神と伶俐な現実認識だろう。そうした意味ではダライ・ラマ法王は単なる宗教的指導者に止まらず、世界で最も優れた政治的指導者の一人であり、中国政府が真に恐れ、蛇蝎のように嫌う原因もここにある。コップの中の権力闘争や保身だけに明け暮れる日本の政治家に、法王の爪の垢でもせんじて飲ませたいものだ。。